

ドイツにおける近代反セム主義

成立の諸前提（1）

下 村 由 一

1

ドイツ・ファシズムとしてのナチズムが反ユダヤ主義あるいは反セム主義Antisemitismus⁽¹⁾をその著しい特徴としていたことは知られている。たとえば A. ブロックは、ヒトラーについて「ユダヤ人を憎悪する気は、恐らく彼が最も真剣に抱きえた感情であった⁽²⁾」といい、事実ナチは単にユダヤ人を迫害したというにとどまらず、ユダヤ人を悪、否定的原理そのものにほかならぬとし、これを絶滅し、⁽³⁾ないしは文明社会から放逐することに人類の運命が係わっているとさえ考えた。ナチズムにおけるユダヤ人に対する憎悪の激しさ、迫害の残忍さと同時に、ユダヤ人絶滅、かれらのいう「最終解決」Endlösungのための計画立案、遂行にあたっての徹底さと系統性は、欧米では現代史研究者はもとより、社会学、政治学、心理学等の分野の研究者の関心をよび、これまでにすでに龐大な研究がナチズムの運動と支配における反セム主義の役割、またその意味について進められてきた。⁽⁴⁾ここではその研究史に立ち入ることはしないで、その中から特徴的な議論だけを取りあげ、問題の所在を明らかにする手がかりとしたい。

ナチズムはユダヤ人を単なる少数民族とは考えず、いわば「反人種」Gegenrasse 即ち否定的原理そのものとみなし、これを絶滅することにこそ世界の幸福がかかっているとした。これに対し、ナチズムを批判する自由主義の側からは、逆に、ユダヤ人という集団の自己同一性を否定し、これを単なる宗教上の信仰と伝統によって結ばれたグループでしかなく、それ以外に何らかの共通の人種的、

民族的な特徴をそなえたグループとは考えない見方が提起されている。これはたとえば J. P. サルトルがその「ユダヤ人」論において「ユダヤ人とは、他の人々がユダヤ人と考えている人間である⁽⁵⁾」と言う時に、最も明確な形をとって現われる。この自由主義的立場は、ユダヤ人を絶対悪、従ってまた時間と空間を超越した超歴史的な存在とみなすナチズムの反セム主義とは論理的な対極をなしている。

その意味で、ナチスの反セム主義を批判し、これを克服しようとするにあたり、このようなユダヤ人＝恣意的存在論が強く前面に押し出されたのは当然であった。だが世界がひとたびナチの徹底した *Endlösung* への試みを経験した以上、ユダヤ人として迫害された人々の側にそれに応じた民族的自意識が生じ、ないしは強まり民族集団としてのユダヤ人が成立することになったのも必然的な過程であったろう。この発展はイスラエル国家の建設に最も端的な表現を見出している⁽⁶⁾。そしてユダヤ人がこうしてかれらの政治的結集点を新たにもつことになった今日、自由主義によるユダヤ人＝恣意的存在論は少なくとも一定の限定を受けざるを得ないし、またユダヤ人の民族意識の強化とそのイスラエル国家への結集を求め、この国家の歴史的必然性を主張するシオニズムの立場からは、うらがえしのユダヤ人絶滅論として非難を受けている⁽⁷⁾。同時にシオニズムはユダヤ民族の歴史的正当性擁護のために、二千年の長いきにわたり離散と迫害とに耐えつつその民族的同一性を失うことのなかった世界史上他に類をみない民族であると主張することにより、ユダヤ人という集団を超歴史的な存在として把握する点で、ナチズムにおけるユダヤ人観と、少なくとも論理的には奇妙な一致をみせてくる。もちろんユダヤ人を絶対悪とするかどうかは、その結果において大きな違いではあるのだが、ひとつの集団を時間と空間を超越した存在とみなす非歴史的な観察において、両者には共通性があったことは否めないであろう。

こうしてナチズム以後の反セム主義批判のなかにも、ユダヤ人＝絶対的存在論とユダヤ人＝恣意的存在論と相対立する両極がみられるのであって、現在のさまざまなユダヤ人論はすべてこの両極の間のどこかに位置づけることができる。たとえばユダヤ人迫害を人類の歴史においてたえず繰り返えされてきた宿命と考える「永遠なる反セム主義」論は、ユダヤ系といわず非ユダヤ系といわず、この問題を論ずる歴史家に意外に多い。これはだが逆にユダヤ人憎悪のひとつの宗教的

な表現としての「永遠なるユダヤ人」にみられる迷信と符合するところがあり、また H. アーレントの指摘するように、近代におけるユダヤ人解放とその同化、世俗化の過程において、ユダヤ民族の自己同一性をあくまで保持するために、特に強く主張された。⁽⁸⁾ この立場からするならば、ナチズムによるユダヤ人絶滅の試みは、単に中世の暗黒時代におけるユダヤ人虐殺の再来であり、また今後も同様な事態は、メシアによる救済に至るまでたえず繰り返えられることになる。ここからはユダヤ人迫害を糾弾し非難することはできても、反セム主義を批判し克服するための理論はでてこない。

反セム主義に関するさまざまな説明のなかで、これまた広く普及している考え方としていわゆる「身代り」Sündenbock 説、ないしは「安全弁」説がある。これはユダヤ人＝恣意的存在論とはごく近い関係にある立場であり、たとえば「ユダヤ人の本質は、反セム主義の抬頭については全く度外視すべきだ」(A. ツヴァイク)⁽⁹⁾ との主張に端的に見られるようにユダヤ人と反セム主義との本質的、内的な関連を断ち切り、支配階級のデマゴギーと操作によって大衆の不満や抗議のエネルギーが単に身代り Sündenbock としてのユダヤ人に対して向けられ、これにより大衆の行動が本来の敵から逸らされるのだとする見方である。近代社会における反セム主義の政治的機能の説明としては、この見方は恐らく正しい指摘を含んでいるであろう。マルクス主義歴史学もほぼこの立場をとっていると考えることができる。⁽¹⁰⁾ だが H. アーレントの批判する⁽¹¹⁾ ように、反セム主義はユダヤ人それ自体とは無関係であり、他のあらゆる形の人種差別、社会的差別と同一現象であるとするこの「身代り」論は、しかし、それではなぜ近代ヨーロッパにおいては、ユダヤ人を対象とする差別が最も顕著で、特徴的な差別の形態として現われたのを説明しなければならなくなると、直ちに自己矛盾に陥るか、あるいはこの点に関しては、たまたまユダヤ人がそのような差別の対象となるに適當であったとして、それ以上の解明を断念せざるを得ないのである。

もちろん、これを断念することによって、「身代り」論は反セム主義の成立と展開の解明にその有効性を全く失ってしまうことはない。特にわれわれ非ヨーロッパ世界の研究者が反セム主義の問題を考えていこうとする際、われわれに身近な人種的、社会的差別の他の形態との共通性なり類似性を見出す上で、恐らく

「身代り」論の有効性は否定できないであろうが、と同時にヨーロッパ社会におけるユダヤ人差別の特殊性を無視するわけにはいかないのであり、とするならば、ユダヤ人問題の歴史的背景にまで立ち入るほかなくなる。もとより、この際歴史家の冒す危険は大きい。歴史研究のもつ一般的な遡行性に加えて、反セム主義の場合には、その「始源的、歴史的絡み合い」(urgeschichtlich – geschichtliche Verstrickung)⁽¹²⁾(アドルノ・ホルクハイマー)に捲き込まれるおそれが特に強いからである。その時には、ユダヤ人論は好事家の知的好奇心を満足させるだけのせんさくか、あるいは文明批評家の歴史的具體性を欠いた考察を出ないことになる。この危険を意識しつつも敢えてこれを論じることを試みるのは、社会科学としての歴史学の方法を認めた上で、なおかつ、この方法の把握し尽すことのできないであるかに思われる、民衆の日常性における感情と行動を歴史の場でどのようにとらえていくかという基本的な問題が、ヨーロッパにおけるユダヤ人問題のうちに含まれており、この問題を考察することにより歴史学の方法と範疇の深化に役立ち得ると思われるからである。とはいえ、抱負は抱負に止まり、ここでまず最初の試みとしてまとめるところは、あくまで、多岐にわたる錯雑したユダヤ人問題と反セム主義の解明のためのいとぐちを求めるものでしかなく、さしあたり問類点の指摘の域を越えるものではない。

註

- (1) 反セム主義 Antisemitismus という名称は、一般にドイツ人 Wilhelm Marr によってユダヤ人排斥を特徴づけるために用いられたのが最初と信じられている。Brockhaus, Meyer 等ドイツの百科辞典, Encyclopaedia Britannicaなどもこう記述している。もっともセム族とアーリア族という区別を人類の決定的な区分とした最初は Ernest Renan (“Histoire générale et Système Comparé des Langues” 1863) であったという。Hannah Arendt, Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft (これはもと、著者が “The Origins of totalitarianism” として書いた著書を自ら独訳し、増補改訂したものである) Frankfurt a. M. 1955. S. 269. また Antisemitismns という名称を初めて用いたのも Renan であったとする説もある。Paul W. Massing, Vorgeschichte des politischen Antisemitismus (Rehearsal for Destruction. New York 1949の独訳) Frankfurt a. M. 1959 S. 231. Anm. 20. しかし、いずれにせよ、この名称が広く政治宣伝活動に使われるきっかけをつくったのは後述のように、Marr であると考えてよい。そして今日では、H. アーレントなどが独自の意味付けによって用いるのを除けば、一般にユダヤ

人に対する敵視，憎悪，排斥，差別つまり反ユダヤ主義を指す語として用いられている。ここでもその意味で用いられる。

(2) アラン・バロック大西尹明訳「アドルフ・ヒトラー」Ⅱ（みすず書房，昭和35年）93ページ。

(3) ナチスによるユダヤ人迫害については，Helmut Krausnick, *Judenverfolgung* (Anatomie des SS-Staates, Bd. 2), Olten-Freiburg 1965.

Leon Poliakov und Josef Wulf, *Das Dritte Reich und die Jnden*. Berlin (West) 1955.

Helmut Eschwege, hrsg., *Kennzeichen J. Bilder, Dokument, Berichte. Zur Geschichte der Verbrechen des Hitlerfaschismus an den deutschen Juden 1933—1944*. Berlin 1966.

などを参照せよ。

(4) この点については，近く発刊予定の「研究史研究」27号に掲載の拙稿を参照せよ。

(5) J-P. サルトル，安堂信也訳「ユダヤ人」（岩波書店，昭和40年）82ページ。

(6) イスラエル建国に至るユダヤ人の歴史，特にシオニズムについては，さしあたり，シーセル・ロス，長谷川真・安積鋭二訳「ユダヤ人の歴史」（みすず書房，昭和45年）（巻末の詳細な日本語文献の目録は有益であろう）。

Jochanan Bloch, *Judentum in der Krise. Emanzipation, Sozialismus und Zionismus*. Göttingen. 1966.

Martin Pressner, *Israel*. in : *Judentum. Schicksal, Wesen und Gegenwart*. hrsg. von F. Böhm und W. Dirks Bd. II. Wiesbaden 1965. (以下 *Judentum* として引用)

Ismar Elbogen, *Ein Jahrhundert jüdischen Lebens. Die Geschichte des neuzeitlichen Judentums*. Frankfurt a. M. 1967.

を参照せよ。

(7) これはたとえば，今評判の，イザヤ・ベンダサン「日本人とユダヤ人」（山本書店，昭和46年）でもそうである。同書87ページを見よ。この点に関しては。さらに，極めて興味深い I. ドイッチャー，鈴木一郎訳「非ユダヤ的ユダヤ人」（岩波書店，昭和45年）を参照。

(8) H. Arendt, a. a. O. S. 11

(9) Arnold Zweig, *Caliban oder Politik und Leidenschaft*. S. 30. Zitiert nach : Eva G. Reichmann, *Flucht in den Haß*. 1969⁷ Frankfurt. S. 28.

(10) たとえば *Sachwörterbuch der Geschichte Deutschlands und der deutschen Arbeiterbewegung*. Bd. 1. Berlin 1969. の Antisemitismus の項を見よ。

(11) H. Arendt, a. a. O. S. 9.

(12) Max Horkheimer und Theodor W. Adorno, *Elemente des Antisemitismus*. in : *Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente*. Frankfurt a. M. 1969. S. 179.

2

特に19世紀後半以降、いわゆるユダヤ人解放がほぼ完了した時期⁽¹⁾に新たに現われてくるユダヤ人差別の全般的な傾向を近代反セム主義と呼んで、それ以前の宗教的差異に基づくユダヤ教徒嫌悪、排斥、迫害と区別する見方は先に触れた「永遠なる反セム主義」観を拒ける論者の一般にとるところである。そのうちで最も明確な区別を考えているのは、H. アーレントであり、彼女は近代以前のユダヤ人憎悪 *Judenhaß* と近代における反セム主義とは同じものではないとし、「ユダヤ人憎悪が……反セム主義より永続するということはまずなさそうだとはいっても、あり得るところであり、それは生涯ユダヤ人に対する憎悪など少しも覚えたことのない反セム主義者がいたのと同様である⁽²⁾」と言う。この見解は一見「身代り」論に通じるもののようであるが、彼女の場合、国家と社会との関係においてユダヤ人問題が、ユダヤ人自身が必ずしも係わりのない理由で「その時代の危険⁽³⁾で、かつ決定的な紛争の要因をそのうちにひめている」ことを指摘し、これを明らかにする点で異なっている。H. アーレントも含めて、このように近代反セム主義をそれ以前のユダヤ人憎悪と区別する者は、前者を特徴づける要素として、その基礎に人種論のあることを重視し、これを人種論的反セム主義 *Rassenantisemitismus* とも呼んでいる。

たしかに宗教的なユダヤ人憎悪と人種論的反セム主義とは同一ではない。それは単に後者が中世のユダヤ人排斥の再版として、近代科学のよそおいを借りて現われたというにとどまらないし、それがユダヤ人にもたらした結果も同一ではない。中世にあってはどんな激情的なユダヤ教徒排斥論者（たとえば M. ルター⁽⁴⁾）もユダヤ教徒の物理的な絶滅を主張しはしなかった。キリスト教への帰依がユダヤ教徒に対し求められたのであった。しかし近代の人種的反セム主義においては、ユダヤ人はその存在自体によって害を流し、従ってその物理的な絶滅によってしかユダヤ人問題のいわゆる「最終解決」はあり得ないのである。実際、ドイツにおいて、人種的反セム主義の出現と殆んど同時にまた、ユダヤ人絶滅による「最終解決」が目標として掲げられるのに至っている。ドイツで人種論を基礎にした反セム主義を政治の場ではじめて主張したのはヴィルヘルム・マル⁽⁵⁾であったと一

般に考えられている。彼は1879年に反セム主義者連盟 Antisemitenliga なる組織をつくり「ドイツ民族意識の立場によるユダヤ的本質の絶滅」を目標に、機関紙「ドイツのまもり」Deutsche Wacht を中心として、反セム主義の出版活動を行なった。⁽⁶⁾以降80年代から90年代を中心に、他の国では例を見ない反セム主義を標榜する政党が、ドイツで続出する。⁽⁷⁾そしてそのうちで前も有力な党のひとつであるドイツ社会改革党 Deutschsoziale Reformpartei (1894—1900) は、1899年の党大会で活動方針を決定し、そのなかで次のようにうたっている、「ユダヤ人問題は」20世紀において「世界的な問題となるであろう。」そしてそれは他の諸国民と協力して、最終的には「ユダヤ人の完全な分離、また防衛上やむをえず、遂にはその絶滅によって解決される。」⁽⁸⁾であろう。

このように世紀の交においてすでに公然と現われた人種論的反セム主義とユダヤ人絶滅論は、しかし宗教的な動機に基くユダヤ教徒排斥と全く無縁であるとはいえない。H. アーレントの所論に対し、K. ティーメはこれを批判して、「近代的な大発電所のエネルギー源とさらさら流れる小川のほとりの水車小屋のそれとは同一ではない、と主張する者があつたら、どういうことになるだろうか。」⁽⁹⁾と言う。これはやや幼稚な反論であるに違いないにせよ、それだけにまた素朴な疑問をそのまま表現しているとも言えよう。事実、人種論に基く反セム主義政治運動が盛んに展開されていた年代においても、ライン地方クサンテン Xanten で少年が殺されたる事件をめぐり、中世さながらに、ユダヤ教徒によるいわゆる「儀式殺人」の噂さがまことしやかに流布され、疑いをかけられたユダヤ教徒が長期にわたる裁判の末無罪となったのちも、反セム主義者、特に、アードルフ・シュテッカー Adolf Stoecker らのキリスト教社会党 Christlichsoziale Partei の反ユダヤ人宣伝はやまず、この地方のユダヤ人たちは移住を余儀なくされるに至ったと報告されている。⁽¹⁰⁾とするならば、近代反セム主義は、それまでに見られなかった人種論を基礎とはしながら、しかしその人種論は、特殊にはドイツ社会において歴史的に形成されてきたさまざまな形と強度の反ユダヤ的ルサンチマンをむしろすべて吸収し、これを集約する機能をもっと考えられないであろうか。その意味では、たとえば H. ローゼンベルクのように人種的、政治的、文化的、経済的反セム主義といった区分を行ない、最後の経済的反セム主義を特に他の者とは区別して考

⁽¹¹⁾
えるのは、適当でないと思われる。ドイツを含めた中部ヨーロッパにおいて、反セム主義の昂揚と退潮の波が、19世紀のいわゆる大不況以降1945年に至るまで、景気の変動の波と一致しているとの彼の分析それ自体は貴重であるとはいえ、これに重点をおくあまり、「経済的反セム主義」という概念に固執し過ぎるきらいがある⁽¹²⁾。

むしろ近代反セム主義のいわばトータルな性格を分析していく上では、典型的な宗教的ユダヤ教徒憎悪が一応影をひそめ、代って人種的反セム主義が全面的に展開されてくるまでの間に、どのような継承が行われたかを立ち入ってみることが重要であろう。具体的には19世紀の半ばの時期において、ドイツでは、ユダヤ教徒なりユダヤ人に対する違和感が、果して H. ローゼンベルクの言うように単に潜在的な形で受け継がれ、大不況のショックのもとに顕在化したに過ぎないのか、あるいはその間に何らかの変容を受けることにより近代反セム主義が可能になったのか、という問題である。この点では G. L. モッセによる興味深い指摘が特に注目に値する。彼は H. アーレントに対する批判の意も込めて、近代ドイツのユダヤ人問題の考察において、大衆文化におけるユダヤ人像の検討を無視することは、重要な次元を欠くことになる⁽¹³⁾と警告する。即ち彼はドイツ大衆文学によって、ドイツ人の間く広くユダヤ人のステレオタイプがつくられ、育てられ、これが近代反セム主義の重要な要因となった、と考えるのである⁽¹⁴⁾。

G. L. モッセは、ヒトラー自身、ユダヤ人問題に関する目を開かされたのはある大衆小説のお陰だった、と述べていることに注目しつつ、このような大衆小説に見られるユダヤ人のステレオタイプがいつ頃成立したかを検討している。彼によれば、この点で重要な作品は、フェリクス・ダーン Felix Dahn の「ローマ攻防戦」 Ein Kampf um Rom (1867年) と、グスタフ・フライターク Gustav Freytag の「借方と貸方」 Soll und Haben (1855年) であるという⁽¹⁵⁾。ロマンチックな恋愛をからませ、中世初期のゴート人によるイタリア遠征を題材としたダーンの歴史小説は1858年イタリア統一に刺戟され、分裂を今なお続けるドイツ民族の統一運動に寄与すべき作品として書かれた。その中での主人公は、ゴート族そのものであり、つまり誠実で勇敢、金髪で男らしい姿には情潔な魂が表われているゲルマン人である。これとは対照的に最も卑劣な行為を犯す人物としてユダ

ヤ人ヨッヘムがえがかれる。——卑劣で憶病、顔附は「その人種の例の計算ずくめの奸智のすべて」をうつし出している。彼の話す言葉は、こうした大衆小説に登場するユダヤ人の例にもれず、イディッシュとドイツ語のちゃんぽんである。そして「遺伝的に」悪であり、いかなる美点ももたぬこの卑劣漢ヨッヘムは、またそれにふさわしく、非業の最後をとげる⁽¹⁶⁾。

今ひとつの作品「借方と貸方」は、その作品の社会的影響という点でも、またその歴史的な意味においても、ダーンの作品よりさらに重要である。1855年発表以来、数十年間読み続けられ、一般では今日もなお読まれているこの小説は、ドイツ人商人を主人公とし、商人を中心とした中間層をドイツ国民の中に組み入れるための試みであった⁽¹⁷⁾。即ち中間層、特に商人は、当時ドイツにおいて進行しつつあった産業革命に伴う階層分化の過程で、特に激しい動揺にさらされており、また資本主義的諸関係の貫徹による古い階級関係が崩れいくのを恐れる側からは、しばしばユダヤ人同様の悪徳、とりわけ浮動性を非難されてもいた。このような非難にこたえて、ドイツ商人がドイツ農民と同様、誠実であり、日々黙々と働き、一カ所に定住して安穏な生活していることを強調した最初の小説のひとつは、F. W. ハックレンダー F. W. Hackländerの「商い」Handel und Wandel (1850年) であるという⁽¹⁸⁾。ここでは、ユダヤ人が否定的な形象としてえがき出されてはいないが、土着のローカルな商人が、外国貿易に従事する「根なし草」の商人との対比において、国民の健全な構成要素として特徴づけられている。「商い」に続く「借方と貸方」においては、長い歴史をもつ、堅実で純潔なドイツの商家シュレーター家を中心に、一方ではドイツ商人が、浪費癖の強い貴族をいかに助けて立ち直らせるかが、他方ではユダヤ人商人エーレンタールが、いかに憎しみに燃え、またいかに根のない存在であり、遂にはそのためにいかに没落せざるを得ないかが示されている。フライタークにとって、貴族は賢明な商人、市民の援助を得て、国民の重要な構成部分としてこれに組み入れられるべきなのであり、しかし、根なし草としてのユダヤ人は国民のうちに占めるべき場をもたないのである。

注目すべきことは、ここでもやはり、ユダヤ人、特にエーレンタール家の手代ファイテル・イツィヒがみにくく、そして、最後には汚い川で溺死という非業の最後をとげる、青ざめた顔で、髪は縮れ、服装はみすぼらしくうす汚い、つま

リユダヤ人のあのステレオタイプでえがき出されており、またあらゆる点で、たえずシュレーダー家とエーレンタール家とが対照的に並べられている点である。もちろんこのような図式的な描写はフライタークの小説家としての力量を疑わせるものであり、当時の批評家からも、また今日の文学史の上でも彼に与えられている作家としての評価は低い⁽²⁰⁾。にも拘わらず、この小説が広い層にわたって最も愛読された作品のひとつに数えられることは事実である。このことは、ドイツにおいてこの時期に都市中間層の広範な出現とともに大学文学成立の社会的・経済的条件が生れ⁽²¹⁾、しかもこの大学文学を担う主体が、ドイツ商人シュレーダーの中に自らの姿を見出したことにほかならない。そしてここに国民の中に位置づけられた自らの社会的自意識を得たドイツ市民とは、1848—49年ブルジョア革命の挫折後に、プロイセン半封建的・官僚国家の主導下における上からのドイツ統一に呼応しつつあった階級にほかならない。このような意味をもつこの作品が、同時にまたユダヤ人ステレオタイプを大衆文化の中に生み出し、これを普及させるに力あったということは、どのように考えるべきであろうか。

註

- (1) ヨーロッパ各国におけるユダヤ人解放の過程については、
Ismar Elbogen, a. a. O.
が要領のよい概観を与えてくれるし、また特にドイツについては
Iemar Elbogen・Eleonore Sterling, Die Geschichte der Juden in Deutschland. Eine Einführung. Frankfurt. a. M. 1966. S. 194 ff.
- (2) H. Arendt, a. a. O. S. 47.
- (3) Ebenda S. 47.
- (4) ドイツの宗教改革者 Martin Luther は、初期には、真に信仰心厚いキリスト教徒とユダヤ教徒とが法王及び聖書の歪曲者たちに対し手をつなぐことを説いたが、晩年にいたりユダヤ教徒を激しく憎み、これを糾弾するようになった。かれにとって、ユダヤ教徒はどんな説教にも耳を傾けようとしない「墮落し、呪われた者たち」であり、また「神の思寵にあづかることのない悪魔の子」であった。「故に汝はユダヤ教徒を避けよ、そしてわきまえよ、彼等が彼等の学校をもつ所、そこは悪魔の巣にほかならず、自画自讃、高慢、嘘偽、悪徳のみあることを。また汝がユダヤ教徒の教えを垂れるところ見聞する時は、それは毒ある邪悪のへび、目をもって人をも毒し殺す、かのへびの声にほかならぬことを知れ。」M. Lnther, Die Juden und ihre Lügen. Zitiert nach: I. Elbogen・E. Sterling, a. a. O. S. 93. さらにルターは、このようなユダヤ教徒に対して、シナゴーク

(ユダヤ教公堂)や学校を焼き払い、彼等の住居をうちこわして、彼等をジプシーと同様、家蓄小屋にとじ込み、ユダヤ教の祈禱書やタルムード、聖書を彼等から取りあげ、ラビの教育活動を禁止し、さらに金貸しを営むことを業じ、財貨を没収し、若者や強健な者には激しい肉体労働をやらせ、結局のところ最善の策は、彼等を永久に国内から追放することであると提唱した。Ebenda ルターを含め、キリスト教のユダヤ教徒に対する考え方については、さしあたり、

Karl Thieme, Der religiöse Aspekt der Judenfeindschaft (Judentum und Christentum.) in : Judentum S. 603 ff.

Rudolf Pfisterer, Im Schatten des Kreuzes. Hamburg Bergstedt. 1966.

Friedrich Heer, Gottes erste Liebe. 2000 Jahre Judentum und Christentum. Genesis des österreichischen Katholiken Adolf Hitler. München und Esslingen. 1967.
を参照せよ。

(5) W. Marrの素姓、前歴などについては、同様に反セム主義活動で名を売った一連の者たちの場合のように、諸説紛々としている。ある者は、マルがユダヤ教徒の子供であると言い、またある者は、キリスト教に改宗した元ユダヤ教徒であるとも、ユダヤ教徒を母として生れた、ともいう。Paul W. Massing, a. a. O. S. 231.

(6) Die bürgerlichen Parteien in Deutschland. Handbuch der Geschichte der bürgerlichen Parteien und anderer bürgerlicher Interessenorganisationen vom Vormärz bis zum Jahre 1945. Leipzig 1968. Bd. 1. S. 37. (以下 Handbuch として引用)

(7) この間のいわゆる政治的反セム主義の動きについては、

P. W. Massing, a. a. O. および Handbuch
のほか

Peter G. J. Pulzer, The Rise of Political Anti-semitism in Germany and Austria. New York. London. Sydney 1964.

Kurt Wawrzinek, Die Entstehung der deutschen Antisemitenparteien. (1873—1890) Berlin 1927. (Nachdruck Vadnz 1965)

を参照

(8) I. Elbogen • E. Sterling, a. a. O. S. 267.

Deutschsoziale Reformpartei についての基本的事項については
Handbuch, S. 759—762.

を参照せよ。

(9) K. Thieme, a. a. O. S. 604.

(10) I. Elbogen • E. Sterling, a. a. O. S. 268.

また Christlichsoziale Partei については
Handbuch, S. 245—S. 255.

K. Wawrzinek, a. a. O. S. 18 ff.

P. W. Massing, a. a. O. S. 21 ff.

Adolf Stoecker については、さしあたり

K. Kupisch, Adolf Stoecker. Hofprediger und Volkstribün. Ein historisches Portrait Berlin (West) O. J.

を参照せよ。

- (11) Hans Rosenberg, Große Depression und Bismarckzeit. Wirtschaftsablauf, Gesellschaft und Politik in Mitteleuropa. Berlin (West) 1967. S. 96.

彼は言う。「1873年から1896年までの傾向期 (Trendperiode) の間に、反セム主義の性格、強度および機能において革命的な転換が起り、なかんずくそれは、明確にきわだった三つの発展傾向として現われた、即ち、経済的反セム主義の数的増加、質的編成替えおよび社会的定着、人種的反セム主義の成立、そして、政治的反セム主義の出現である」。(力点は著者による強調) Ebenda S. 93, そしてここで著者の言う「経済的反セム主義」とは、「主観的には種々の動機に発するが、主として客観的、経済的状况、物質的利害および階級間の紛争によって規定されたユダヤ人敵視」のことである。Ebenda. このような規定で、なおさらに「政治的」「人種的」「文化的」等々の反セム主義を想定し得るのは不可解である。

- (12) 彼は近代反セム主義の波と景気変動のそれとの一致を次のように要約している。「こうして、大不況 Great Depression の傾向期は近代反セム主義にとって大草創期であり、その最初の高揚期であった。その後1896年から1914年まで、十分に満足のいく高度工業化の時期、その間に農業、小企業も再び力を回復するが、その時期には、近代反セム主義は低調になる。ところが、にわかに、しかもそれまでにもまして急激に、中部ヨーロッパの諸帝国の崩壊の後、1913年から1939年までの危機と破局に富んだ傾向期の間に、反ユダヤの憎悪の波は再び高まり、遂には、かの絶滅の思想と絶滅の意志をもった民族社会主義の大量殺人工場が、1870年代にさかのぼった時期に始点のある、一世紀近い傾向を終結させるのである」 Ebenda. S. 95.

- (13) Ebenda. S. 90.

- (14) George L. Mosse, Germans and Jews. the Right, the Left and the Search for a "Third Force" In Pre-Nazi Germany. New York 1970. S. 61 f.

- (15) Ebenda. S. 63.

- (16) Ebenda. S. 63 ff.

なお F. ダーン自身も、この彼の作品も、今日の文学史では殆んど顧みられることがない。たとえば、F. マルティニは、「歴史的、考古学的小説」という小節の下に、他の同時代の一連の作品とともに、F. ダーンの「ローマ攻防戦」を次のような特徴附けで片附けている、「(その中には一引用者) 民族的かつゲルマン主義的なゲルマン人崇拜、英雄と行為とのセンチメンタルな熱情が、ヒロイックでペシミスティックな生活感情とまじり合っており、そしてその感情はショーペンハウアーとダーウィンという矛盾した起源に発しており、また青年ドイツ派流の問題人物、さらには E. シュエのフランス怪奇小説の語り口をかりて現われていた。」 F. Martini, Deutsche Literatur im bürgerlichen

Realismus 1848—1898. Stuttgart 1964. S. 448.

- (17) “Soll und Haben” は、6章、約1000ページにのぼる長編小説であるが、たとえば、1896年刊の第2版ですでに、当時としては群を抜いた一万部に及んでいる。(G. Freytag, *Gesammelte Werke*. Leipzig 1896. の中、4, 5巻がこの作品にあてられている。) 戦前、日本でも翻訳が出た。また、19世紀末から20世紀初頭、ドイツの皇帝から始まり、貴族、ブルジョアジー、小市民の間で最も広く読まれていたのは、18, 19世紀の古典について G. フライターク等であったという。Hans Schwerte, *Deutsche Literatur im wilhelminischen Deutschland, in Zeitgeist im Wandel, Das wilhelminischen Zeitalter*. hrsg. von H. Schoeps. S. 123 f. さらに、第二次世界大戦後も西ドイツで、彼の全集が出されている。

- (18) G. L. Mosse, a. a. O. S. 66 f.

「借方と貸方」をドイツのすべての長編小説の中で最も読まれた作品と呼んでいる、F. メーリングは、フライタークをまた、ドイツ・ブルジョアジーの「代表的人物」であるとし、「その発展のある時期がかくも忠実に反映されているのは、フライタークの歴史書、文学作品、政治論をおいてない。それは、1850年から1870年までの時期であった。」また「やみくもに世に認められようとするブルジョアジーのために、巧みで柔かい手で、文学による産婆の役を務めてやった者は、彼をおいてまたとない。」F. Mehring, *Aufsätze zur deutschen Literatur von Hebbel bis Schweichel*. *Gesammelte Schriften*. hrsg. von Th. Höhle, H. Koch, J. Schleifstein. Berlin 1961. S. 63 f.

- (19) G. L. Mosse, a. a. O.

- (20) この小説に与えられた当時の評価については、

Friedrich Winterscheidt, *Deutsche Unterhaltungsliteratur der Jahre 1850—1860*.

Bonn 1970. S. 199 f. また文学史の評価としては、たとえば、

F. Martini, a. a. O. S. 422 ff. (「彼は、ビーダーマイヤー流儀と道徳的な勸善懲惡図式で、光明に満ちた姿をえがいた。」)

また E. フリーデルは言う、「およそフライタークの際立った欠陥は、悲劇的なところはいささかもなく世界に満足しきっており、どうかすると、それはまさしく不道徳なところもあるほどだし、それに、偏狭なまでに問題のない物分りのよさである。」Egon Friedell, *Kulturgeschichte der Neuzeit. Die Krisis der europäischen Seele von der schwarzen Pest bis zum ersten Weltkrieg*. Bd. 3. *Romantik, und Liberalismus / Imperialismus und Impressionismus*. München 1954. S. 280.

- (21) この時期における大衆文学の状況については、

F. Winterscheidt, a. a. O. S. 55 ff.

を参照せよ。

3

G. フライタークをそのまま近代反セム主義の代表に数えるわけにはいかない。G. L. モッセも言っている、「ダーンにせよ、フライタークにせよナチズムの人種論的反セム主義と同意見ではなかった。」⁽¹⁾フライターク自身は自ら自由主義を標榜⁽²⁾していた。ただし、彼は彼のドイツ国民の歴史への深い執着が示すように、⁽³⁾過去からの生活の根とこれを保ち続けてきた国民への憧憬とその重視によって限定された、まさにドイツの自由主義者であり「ドイツ自由主義の悲劇」を典型的に代表する人物のひとりであったとも言えよう。⁽⁴⁾自由主義者としての彼は、ユダヤ人についても、中世のユダヤ教徒迫害を「国民の恥辱」とみなすのである。⁽⁵⁾また彼が直接接した個々のユダヤ人についても尊敬と友情を惜んでいない。⁽⁶⁾このような態度は彼の作品にも現われており、先の小説中でもユダヤ人がひとしなみに卑劣漢とされているわけではない。エーレンタールの息子は、父の商売と生活ぶりを軽蔑し、両親や他のユダヤ人の性質を思うと死ぬほど恥しくなるような、心からドイツ国民に同化しきった「善良なユダヤ人」なのである。このようにユダヤ人の同化の可能性を認めている以上、フライタークを人種論的反セム主義者とみなすことはできない。しかし、また、彼の場合、プロテスタンティズムの信仰が⁽⁷⁾大きな精神的支えになっているとはいえ、そのユダヤ人観が専ら中世の宗教的動機に基いているとも云えない。

むしろユダヤ人の同化の問題が強く提起されたのは、啓蒙思想においてであって、この意味では、モッセも指摘するように「フライタークは啓蒙の伝統の上に⁽⁸⁾立っていた」と考えることもできよう。18世紀啓蒙思想がユダヤ人解放の思想的準備を果たしたことは事実であるが、啓蒙思想における対ユダヤ人観は必ずしも明確なものではなく、一種の微妙な影を絶えず伴っていた。これはドイツに限らずイギリス、フランスなどについても見られるところであり、初期啓蒙思想の教会批判、キリスト教批判がその力点をしばしば旧教聖書とユダヤ教に対する批判においていたことはたとえば H. リーベシュッツによっても強調されているところである。⁽⁹⁾同じ著者はヴォルテールについてもそのユダヤ人嫌いを指摘しているし、⁽¹⁰⁾またホルクハイマーもヴォルテール、またドイツについては、カント、フィヒテ等

におけるユダヤ人に対する強い反感を指摘している。⁽¹¹⁾ アドルノ、ホルクハイマーは、この事実のうちに啓蒙思想そのものの限界を見出すことができると考えており、⁽¹²⁾ 恐らく彼等の主張はそれ自体として正しいであろうが、ユダヤ人問題との関連では、また別の観点も見逃すことはできないであろう。即ち、ユダヤ人解放と近代国民国家形式との関係である。即ちユダヤ人解放は、一方では近代的国民国家 (Nationalstaat) 形成、いかえれば身分制国家 Ständestaat を解体し、各身分のそれぞれ異なった権利を有する構成員に法の前の平等を与え、同等の市民として国民の中に組み込む過程において、それまでひとつの身分、しかも全体としては無権利の状態におかれていた身分であるユダヤ人をこの身分から解放し、市民として平等の権利と義務を与えることにほかならなかった。しかしこの過程で国民国家は、その本来の性格上、これを構成する市民の同質性を前提としており、従ってユダヤ人に対しても同化を要求せざるを得なかった。事実、18世紀末ドイツにおいて始めてユダヤ人解放の必要を説いたChristian Wilhelm Dohm (「ユダヤ人の市民的改善について」 “Über die bürgerliche Verbesserung der Juden” (1781年)はまた同時に、ユダヤ人の教育による同化促進の重要性をも指摘していたし、⁽¹³⁾ 1812年プロイセンにおける諸改革の過程で実施されたユダヤ人解放の条令は、また将来におけるユダヤ人の教育を不可欠としていた。⁽¹⁴⁾ この国民国家へのユダヤ人の同化が、ユダヤ人の側からの抵抗と、また同時にユダヤ人をひとつの身分のまま権利を与えようとする19世紀前半における封建的反動の試みも手伝って、期待通りに進まなかった時、「善良な同化ユダヤ人」とそれ以外のユダヤ人との差が対照的に強調されるに至ったと考えることができよう。

さらにこれに加えて、フライタークの場合、ドイツ市民階級が貴族、大土地所有者に対し、国民国家の正当な、しかも指導的な成員としての自己主張を貫ぬこうとする時、彼等の政治的無力と経済的弱体をカバーするために、徹底して否定的なタイプを設定し、これとの対比において自らの存在の積極的意義を強調すべき客観的必要に迫られていたと言えないであろうか。そして、その否定的なタイプとしてたとえば、プロイセンにおける少数民族であるポーランド人⁽¹⁵⁾でなく、ユダヤ人が選ばれたのは、ユダヤ人が一方ではロートシルト (ロスチャルド) のように全ヨーロッパにまたがる腕利きの金融業を、また同時にマルクスのような過

激な革命運動を、さらにジャーナリズム等の批判的インテリゲンチンを、しかもまた他方では東ヨーロッパから流入して来るいわゆる東方ユダヤ人、半ばルンペン化した小商人を代表していたからであり、これら国民国家を形成するにふさわしくない諸要素に共通する特徴として「根のない存在」を見出したからであった。この「根のない存在」という観念が以後、反セム主義におけるひとつの重要な特徴として見出されることは、モッセの指摘するところであるが、またこのように互い矛盾し合う諸要素が「ユダヤ人」というステレオタイプのもとにまとめられてしまうのも、近代反セム主義に顕著なところであり、ナチスに至ってそれは、ユダヤ的国際金融資本、ユダヤ的・ポリシェヴィキ的ロシア、ユダヤ的民主主義、ユダヤ的不潔漢といったスローガンとして頂点に達する。

このように、いわゆるユダヤ人が社会各層のいずれにも見られるということは、客観的に見るならば、現実に行進しつつある資本主義的階層分化が、かつて中世期にはほぼ同等であったユダヤ人という身分をもとらえ、その結果社会経済的には、等質なユダヤ人グループがもはや存在しなくなっているという事態の反映であると考えられる。この過程はもちろんかなり長期にわたり、17世紀にいわゆる宮廷ユダヤ人 Hofjude が現われて絶対主義権力の戦費調達などに不可欠の道具として使われ出した頃からすでに始まり、18, 19世紀の交にはかなり進行していたものと思われる⁽¹⁸⁾。それにも拘らず、ユダヤ人の側にもまた非ユダヤ人の側にも、ユダヤ教徒がキリスト教中世において閉鎖的集団たることを余儀なくされたことの歴史的結果として、主観的にはなお強く等質な存在として意識されていた。客観的には存在せず、しかも主観的にはなお強く意識されていた「ユダヤ人」はそれ自体矛盾した観念であるが故に、矛盾した観念をみごとに調和せしめるにまことに好都合な役割を果すことになったとは考えられないであろうか。

フライタークが三月革命の敗北後にあって、ドイツ市民階級の国民的存在としての自己主張を、その作品において試みた時、それは矛盾に満ちた観念の統合となるほかなかった。ナショナリズムと自由主義が近代ドイツにおいて、いわば diametal な関係にあることは、しばしば指摘されているところであるが、フライタークにおいては、それは自ら自由主義者をもって任じつつ、プロイセン主導⁽¹⁹⁾の上からのドイツ統一を無条件に支持する点に現われており、またそこで実現さ

るべき国家が、国民国家と称しながら、実は貴族、市民、農民による身分制国家への傾斜をたえずうちにはらんである事実にも見ることができる。さらに言うならば、国民国家の創設を与える理念としてのナショナリズムが、その国民国家の枠を破り、国境を越えて同一民族の結集を求める人種論とは本来的には矛盾するものでありながら、⁽²⁰⁾ ドイツにおいては、いわゆる *völkisch* と呼ばれる立場において統一され、しかもその際に反セム主義を伴うドイツ独自の流れも、このフライタークにおいて、あるいはすでに見出され得るのではなかろうか。いずれにせよ「借方と貸方」が出て約20年後、1870年代の末頃から、激しく展開されるドイツの近代反セム主義においては、ここに指摘したような矛盾した観念の統合概念としての「ユダヤ人」はフルにその機能を発探するに至る。その際、特に著しい特徴をなすのは、*ständisch* なイデオロギーに与えられた社会改良、大資本打倒の社会的デマゴギーである。⁽²¹⁾

そしてこの反セム主義政治運動の伝播にあづかって力あったと考えられる、ベルリン大学歴史学教授 H. v. トライチュケのユダヤ人排撃の論文「われわれの見通し」*Unsere Aussichten*(1879年, *Preußische Jahrbücher*)⁽²²⁾を読む者は、その根本的な問題意識と思考過程が、尖鋭な危機意識によってさらに深刻にはなっているものの、いかにフライタークのそれと似通っているかに驚くであろう。しかもこの激烈な「よからぬユダヤ人」告発の論文は、たしかに同じくベルリン大学の同僚、歴史学 Th. モムゼンの反撥を招き、トライチュケは大学内で殆んど孤立する結果にはなったが、⁽²³⁾ やがてはインテリゲンチヤの間に反セム主義を一般的な傾向として定着させるに至った。⁽²⁴⁾ このように見るならばフライタークによるステレオタイプ、ユダヤ人の形象化は無視できない意味をもっている。もちろん、このことがドイツにおけるユダヤ人像はフライタークによって創出されたという意味に理解されるならば誤まりであろう。ステレオタイプは文学理論でいう典型ではなく、従ってそれは創出されるものではなく、単に継承されるにすぎない。かれのえがいているユダヤ人像は、すでに15世紀のカリカチュアに見られるそれと類似している。ただこのようなステレオタイプが大衆文学初期の時点において成立し、その普及と共に伝播されたこと、及び内在的な矛盾を蔽いかくす、いわば魔法呪文として「ユダヤ人」が使われ、それ以後の反セム主義の範例となったとい

う意味で、中世的ユダヤ人憎悪から近代反セム主義へと至る過程において、ひとつの重要な接点をなすとみることができるように思われるのである。

註

(1) G. L. Mosse, Ebenda S. 70.

(2) Ebenda

また、彼の自伝

Erinnerungen aus meinem Leben. Gesammelte Werke. Bd. 1. Leiptig 1896.

特に、そのうち1848年三月革命当時の回想などを見よ。Ebenda. S. 153 ff.

(3) 彼は、ドイツの文化史、社会史に対し常に強い興味と深い憧憬を抱き続けた。それが小説「祖先」“Die Ahnen” (1872/89) および、今日でもなおかなり高く評価され、広い読者をもつ歴史叙述「ドイツ人の過去像」“Bilder aus der deutschen Vergangenheit”を生んだ。

(4) G. L. Mosse, ebenda

(5) 中世期、十字軍遠征当時におけるユダヤ教徒迫害に触れて、彼は次のように書いている、「……そして、こういったユダヤ教徒迫害といって、ドイツ人の負い目になる、これがその最初の迫害ではなかったのだが、それは、これ以後、民衆が宗教的な熱狂や突無襲いかかる災厄に興奮すると殆んど必らず、恐しいまでに定期的に繰返えされた。数世紀にわたり（ユダヤ教徒一引用者）狩りは、ドイツ国民の恥辱であった。」Bilder aus der deutschen Vergangenheit. Bd. 1. Berlin. o. J. S. 367 f.

(6) Erinnerungen aus meinem Leben. a. a. O. S. 153 f.

(7) 彼は、その自伝の中で、自分がプロイセン人であり、プロテスタントであり、かつまたシュレジア生れであったことを真に決定的な点として回想している。Ebenda S. 4.

(8) G. L. Mosse a. a. O. S. 71.

(9) Hans Liebeschütz, Das Judentum im deutschen Geshichtsbild von Hegel bis Max Weber. Tübingen 1967. I. Kapitel. 特に S. 35. (「今日、啓蒙の時代を振り返ってみる時、奇妙に思われるのは、すべての人びとに共通の宗教のためのこのラジカルな運動（理神論をさす一引用者）が、ユダヤ少数民族の聖典に反対するはっきりした傾向をもっていたことである）

(10) Ebenda S. 7 ff.

(11) Research Project of Anti-semitism. Idea of the Project. in: Zeitschrift für Sozialforschung. hrsg. von M. Horkheimer. Jahrgang IX 1941. S. 130 ff.

(12) M. Horkheimer und Th. W. Adorno, a. a. O. S. 177 ff.

(13) これについては、

G. L. Mosse, a. a. O. S. 39 f.

I. Elbogen・E. Sterling, a. a. O. S. 159 f.

を参照せよ。

(14) I. Elbogen・E. Sterling, a. a. O. S. 181 f.

(15) ドイツ第二帝制期におけるポーランド人問題, 彼等に対する差別とその政治的, 社会的意味については,

Hans-Ulrich Wehler, Von den "Reichsfeinden" zur "Reichs-Kristallnacht". Polenpolitik im Deutschen Kaiserreich 1871—1918. in : Krisenherde des Kaiserreichs 1871—1918. Studien zur deutschen Sozial-und Verfassungsgeschichte. Göttingen 1970. S. 181 ff.

を見よ。

(16) ポーランドその他東ヨーロッパ諸国に定住し, 独自の言語 (Jidisch) 習慣を守り続け, 社会下層を形成していたユダヤ教徒を Ostjude と呼ぶ。彼等が Pogromm を逃れ, あるいは新天地を求めて西ヨーロッパ諸国に流出して, そこでのユダヤ人観に大きな影響を与えた。G. L. Mosse, a. a. O. S. 73.

19世紀中葉から後半にかけてのユダヤ人の地理的分布は次のようであった。

	1850	1880
全世界におけるユダヤ人総数	4, 764, 500	7, 663, 500
うち		
西・中部ヨーロッパ	693, 500 (14. 5%)	1, 044, 500 (13. 6%)
東ヨーロッパ	3, 434, 000 (72. 1%)	5, 726, 000 (74. 8%)
ヨーロッパ全体	4, 127, 500 (86. 6%)	6, 771, 500 (88. 4%)
ア メ リ カ	65, 000 (1. 4%)	250, 000 (3. 3%)
ア ジ ア	320, 000 (6. 7%)	350, 000 (4. 5%)
ア フ リ カ	250, 000 (5. 3%)	280, 000 (3. 6%)
オーストラリア	2, 000 (—)	12, 000 (0. 2%)

Arthur Rupp, Soziologie der Juden. Bd. 1. Die soziale Struktur der Juden. Berlin 1930. S. 89. また Ostjude の社会状態については, 上掲書 S. 315 ff を参照せよ。

(17) G. L. Mosse, a. a. O. S. 67.

(18) もちろん, このことを実証的に的確にすることは著しく困難であろうが, 一方で Hofjude, また Ausnahmejude と Schutzejude と呼ばれた, 少数の富裕なユダヤ教徒が出たと同時, 18世紀後半には, 特に浮浪者として各地をさすらいわゆる, fahrendes Volk やまたは盗賊や追はぎの群の中にユダヤ教徒が増加してくることは指摘されている。Gustav Radbruch, Die Juden, hrsg von Hatanaka. Tokyo 1965. S. 20 f. 一般に fahrendes Volk の増加は, 農民, 手工業者, 商人のプロレタリア化の過程の反映と考えられ, ユダヤ教徒の場合, もともとその生活の基盤は極めて脆弱であったから, より激しくこの過程に把握されたことは想像できよう。

Karl Dietrich Bracher, Über das Verhältnis von Nationalbewußtsein und Demokratie. in : Entstehung und Wandel der modernen Gesellschaft. Festschrift für Hans

Rosenberg zum 65. Geburtstag. hrsg. von G. A. Ritter. Berlin (West) 1970.
S. 166 ff.

を参照せよ。

(20) この点に関しては, H. Arendt, a. a. O. S. 5 f. を参照せよ。

(21) この点に関しては P. W. Massing, a. a. O. また Handbuch 等を見よ。

(22) この論文は, それさに続いて行われた論戦, いわゆる Berliner Antisemitismnsstreit
の関係文献と共に Walter Boehlisch, hrsg., Der Berliner Antisemitismusstreit.
Frankfurt a. M. 1965 に収録されている。

(23) W. Boehlisch, a. a. O. S. 245.

(24) Ebenda